

上方落語に見られる尊敬語人称代名詞と 名詞の語用論的分析

角岡 賢一*

A Pragmatic Analysis of Personal Pronouns and Nouns in the Kamigata Rakugo Stories

Ken-ichi KADOOKA*

In this paper, a pragmatic analysis of the pronouns and nouns of honorific locutions will be shown citing the examples from the Kamigata Rakugo stories. In these pronouns and nouns, deference toward the hearer or the third party is shown. One of the main topics in this paper is that the degrees of deference are distinguished in each lexical item. The second person pronoun 'anata' is politer than 'anta,' for example. It is possible to rearrange the lexical items from the politest to the least, or illustrated in a two-dimensional chart when the genders of the speakers are distinguished.

第一節 はじめに

本稿では、上方言葉における待遇表現として尊敬語の代名詞と名詞を論ずる。本書で分析の題材にするのが上方落語であるが、旭堂南陵師『演芸速記本基礎研究』によると、元来は大坂落語、京都落語と呼び習わしていた噺を「上方落語」として括ったのは比較的最近であるという。明治十六年生まれ、橘ノ圓都師は、残された音源で「古い大阪落語を聴いて戴きます」というように口演していた。以下では上方落語として括ることとする。時代としては実質的に丁稚制度が残っていた太平洋戦争末まで、場所としては大坂船場が最も格式の高い言葉遣いであった。

本稿は「語用論的分析」と銘打っているが、基本的に選択体系機能言語学（以下では「機能文法」と称する）の枠組みに立脚するものである。機能文法では伝統的言語学のように社会言語学や語用論という縦割りの立論をしない。それに代えて、社会構造の中にある言語事象を捉えるために幾層もの構造が多重に錯綜するような図を描く。例えば山口登氏「選択体系機能理論の構図」では、この理論が自然言語をどう把握しているかという図が示されている。それによると、最も外側に位置する構造として文脈（コンテキスト）を考える。その内側に、価値観の複合体として文化を位置付ける。そして文化を構成するのは、一次的活動領域・役割関係・伝達様式の複合である「状況」と、二次的活動領域・役割関係・伝達様式の複合である「使用域」であるという。状況は「いまどのような対人的相互作用がおこなわれているのか」であり、使用域は「対人的相互作用が互いにどのような発話役割を担っているか」である。本書の内容に即して言えば、文化とは京阪を中心

* 龍谷大学経営学部教授

とする地域的な特徴を捉えて「上方文化」というように括ることが可能であろう。「状況」というのは、狭く言えば「活動領域」に相当する。どのような状況において筋書きが進行するかは、本筋に入って二言三言聴けば、忽ち明らかである。「役割関係」とは、誰が誰に対して話しているかという対人的相互作用である。「伝達様式」は書き言葉か話し言葉かという選択である。話芸においては、手紙や書面を読み上げる場面以外は基本的に話し言葉である。二次的構造である言語使用域とは、機能的変種である。このように機能文法では、語用論や社会言語学という狭い視点ではなく、言語使用を社会活動の中に位置付けるという巨視的な考えから出発するのが一大特徴である。本稿ではこのような機能文法の考え方も取り入れて論を進めることとする。

以下の議論で、卑尊度という尺度を導入する。人称代名詞を例に採ると説明しやすいのであるが、相手に呼びかけるのに「貴方様、尊公」というような最大限の尊敬語から、「あんた、おまはん」というような中間段階を経て「おのれ、おんどれ」というような最大限の野卑度まで、無数と言えるほどの変種が存在する。これら語彙を一直線上に並べると、卑尊度による分析の有用性が一目瞭然となる。どのような場面においてどのように相手を待遇するかは、まさに語用論的側面である。同じ相手に対しても、状況によって呼び方を変えることもある。本稿で扱うのは、ある程度の敬意あるいは親しみを以て相手に呼びかける範囲の人称代名詞と、丁寧な言い方をする名詞の部類である。

以下、人称代名詞と一般名詞という語彙項目別の分類などについて分析していく。

第二節 尊敬語の人称代名詞

本節では、上方言葉における待遇表現を統語範疇別に検証する。定義上、尊敬語というのは相手または三人称目当てであるから一人称代名詞は対象外である。従って、まず二人称代名詞から始める。

二人称人稱代名詞

待遇表現を品詞別に分析すると、語彙項目が多様で卑尊度の幅も大きいのが人称代名詞である。本節でも、まずは人称代名詞の分析から始めることとする。誰が誰にどういう状況で呼びかけているかによって呼称が大きく変化するが、男女の性差も関わっている。後に纏めて分析するため、通し番号を振る。

①「あんたはん」

『大阪ことば事典』33頁で「アンサン」という見出しで「あなたさんの略語。主として商人用語で、一般には、アンタハンを用いた」(強調の傍点は原著、音の高低を示す傍点は省略した)という語釈がある。しかし実例では「あんさん」は頻出するが、「あんたはん」は珍しい。噺『崇徳院』において、若旦那が高津の宮で見かけた娘はんが緋塩瀬の茶袱紗を忘れて席を立ったところに、「これあんたはんのと違いますか」と声を掛けている。良家の育ちである若旦那が初対面の異性に「あんたはん」と声がけをしているというのが注目に値する。確かに「あんさん」に比べても余所余所しい語感である。

噺『口入れ屋』で、丁稚の定吉が神棚のお灯明を消して廻りながら「神さんもなぶりもんやがな、まるで。ま、えらいすんまへんけど、消さしてもらいまっさ。あんたはんもえらいご災難でん

なあ」と喋っている（『米朝全集』第三卷）。神棚に祀ってある神様を相手に「あんたはん」と呼びかけているのである。丁稚が神様に話しかけるという立場上、この「あんたはん」は「あんさん」と同程度の敬意表明と捉えておく。

②「あんさん（方）」

「あんさん」の例を噺『けんげしゃ茶屋』から挙げる（『米朝全集』第三卷）。大晦日に路上でミナミの幫間又兵衛さんと出くわした村上の旦さん¹⁾、立ち話の中で新町の一件について説明すると、又兵衛さんは「はあ〜ッ、旦さんそらまああんさんやなかったらでけん芸当でおまっせ」と感想を述べる。幫間として又兵衛さんは村上の旦さんに最上して貰う立場である。そういう相手に対して「あんさん」という人称代名詞で呼びかけているという点は注目に値する。

もう一点、形態論的観点から興味深い現象が複数形の「あんさん方」について見出せる。日本語全般において、名詞の単数と複数の区別は曖昧であると言えそうである。特に普通名詞については「木々、日々、人々」というように置語形式は見られるものの、複数形と言うよりは「個々の木、日、人」を指しているようにも考えられる。しかし人称代名詞の「あんさん」と「あんさん方」については、厳然たる単数－複数の区別がなされなければならない必然性がある。即ち、「あんさん」と呼びかけるのは相手が一人の場合に限られる。相手が二人以上の場合は「あんさん方」と複数形態素「方」の付加によって明示することが必然となる。噺『宿屋仇』で、宿を探す兵庫の若い者三人連れに対して、日本橋の宿屋紀州屋源助から、「へえ、あんさん方どうぞお泊まりを」と声を掛けられる（『米朝全集』第七卷）。この場面では、三人連れであるというのは見たところ明らかであるので「あんさん」と声を掛けることはできない。噺『瘤弁慶』の前半は天津の宿であるが、ここでも宿の客引きは喜六清八を捉まえて「あんさん方、お泊まりを」と声を掛けている（『米朝全集』第三卷）。

③「あなた様」

「あんさん」よりも丁寧度が増すと、「あなたさま」になるであろう。噺『骨釣り』で島之内の袋物屋の娘ひなと名乗る女が「、、身寄り頼りのない悲しさ、水一口の手向けもなく、浮かびもやらで今日が日までむくろを沈めておりましたが、あなたさまのありがたいご回向にあずかり、浮かぶことができます」（『米朝全集』第三卷）と物語る。相手は幫間の繁八である。場面はいま少し説明が必要であろう。繁八が若旦那のお供で、川遊びで釣りをする。釣り上げたのが人の頭蓋骨で、若旦那に諭されてお寺で廻向をして貰う。娘は夜中、繁八宅に出現して礼を述べたのである。女から男に対して、しかも初対面という場面であるから最大限の丁寧度で「あなた様」と称したと考えられる。

次は芝居がかった調子で発せられる「貴方様」である。噺『土橋萬歳』では、放蕩の若旦那を忠義の番頭が諫めようとする（『米朝全集』第五卷）。番頭はお茶屋の外で説得しようと試みたが、二階の座敷に引き上げられてしまう。芝居がかった調子で「あなた様はな」と呼びかけると、傍らの幫間が口三味線で合いの手を入れる。すると番頭は「誰やそんな芝居の真似みたいで……。わたい歌舞伎役者の声色使うてんのやおまへんのやがな。若旦那、まあ、あんたまあ、なんということをして……」と、次にはあんた呼ばわりに変わっている。ここでは番頭の意図は読みづらいが、「あなた様」の実例である。次期当主であるから「貴方様」と奉るのが原則であろうが、お茶屋遊びの様子を目の当たりにして、ついあんた呼ばわりになったとも考えられる。

次の「あなた様」は『三枚起請』に見られる。難波新地の宇津木という店に勤める小輝という娼妓が、友人同士である源兵衛と喜六、清八という三人に同じ文面の起請文を渡す。殆ど漢字がない元の文面は下、読みやすいように漢字仮名交じりに改めたのが上である（『米朝全集』第四卷、高島幸次氏（2018：96, 97））。

- (1) 一、天罰起請文之事、私こと年明け候へば、貴方様と夫婦になり候こと実証也、後日のため、依って件の如し。下駄屋喜六様、宇津木店小輝こと本名たね
ひとつてんはつきしやうものこと。わたくしことねんあけさふらへば、あたさまとふふになりさふらうことじつしやうなり。ごじつのためよってくだんのごとし。げたやきろくさま、うつぎみせこてることほんみやうたね

同じ文面で三枚の起請文、とは言え喜六宛ての文面(1)では「あなたさま」の「な」と「ふうふ」の「う」を故意に抜いている。清八宛の証文は字が揃っている。「貴方様」は書き言葉で、最上級の丁寧度であろう。起請文という文書の性質上、書式や言葉遣いは固定されていたものと思われる。座敷で対面した折は小輝は「源やん、お越し」と迎え、源兵衛に対して「あんた」と呼びかけている。起請文の事情などについては高島氏の上掲書が詳しい。噺において、文面を読み上げているかの如くに語るのが話芸というものであろう。喜六は、末は小輝と所帯を持てるものと喜んだのであるが、小輝の方が男を手玉に取る手練手管では二枚も三枚も上手であった。

④「尊公」

最上級の尊敬度、「あなた様」と同程度とも考えられ、漢文調のような硬い語感を持つ敬称に「尊公」を挙げる。これは特殊な言い方で、実例は『くしゃみ講釈』で男——例によって名前を呼ばれていない——が朋輩の政はんに対して「それではなにぶん、尊公のご加勢をもって、尽力を」という一例しかない（『米朝全集』第三卷）。場面は、男が恋路の邪魔をされた講釈師の後藤一山先生に仕返しをする智慧を政はんが貸そうとしているところである。『日本国語大辞典』では「尊公」は、多く男性が男性に対して用いるという説明がある。この場面にも該当するが、男の言い方がまるで講釈師のような文語的な言葉遣いを選んでいるのである。

⑤「あなた」

標準的な現代日本語で、二人称代名詞として代表的とも言えるであろう「あなた」は、噺では探すのに苦労するほど見当たらない。一つには、「あなた」という呼びかけは現代語的で余所余所しいという語感がするのと、実際に相手に向かって「あなたは、.、.」というような言い方が詰問調になるからというような観察が可能であろう。現代の家庭であれば、妻が夫に向かって「あなた」と呼びかけるのは見慣れた風景であろう。しかし「古典落語」と言われる時代においては、これでは斬新すぎる。実例として、子から親への呼びかけが見られた。噺『親子茶屋』で、大店の当主が毎日のようにお茶屋遊びをする息子に対して意見をする（『米朝全集』第二卷）。息子が「そらこっちも一緒にでんがな。日々毎日、相も変わらんことばかり聞きたいもんか、聞きとないもんか」、親「それをこなたが言わしなさる」、子「あんたがおっしゃるので」「こなたという人は」「あなたという人は」「掛け合いじゃ、まるで」。この掛け合いで、親子が互いと呼ぶのに種々の二人称代名詞を交えている。親から子へは「こなた」と丁寧である。逆に子から親へは「あなた、あんた」と

丁寧度で差がある。「あなた」はどこか余所余所しい響きがあるが、「こなた」とは対になる。ところが「あんた」は「こなた、あなた」に比べると粗略な扱いである。どうやら、ここら辺りに極道息子の片鱗が窺えるようである。

男から女への呼びかけという珍しい例がある。噺『阿弥陀池』で、尼寺に押し入った強盗が拳銃を突き付けて尼僧を脅かすが、日露戦争で従軍した上官の妻女が出家したものと知る場面である(『米朝全集』第一卷)。「さては貴女が山本大尉の奥方でございましたか」と話したと甚兵衛さんは言うが、これは作り話である。『阿弥陀池』という噺は、桂文屋師が創作したと伝わっているが、新聞を読むことにしても、強盗が拳銃を持って押し入るということにしても、斬新な風俗を取り入れている。

次は先代米團治師の筆になる噺『代書』の台本である(『寄席随筆』)。この噺は、実際に米團治師が代書事務所を構えていた折の実体験を基にしており、今から八十年ほど前の世相も反映している。戦後になってからはこの噺は履歴書を代筆してもらう依頼人の段だけで完結させているが、本来は依頼人は四人であった。その三人目が「ハイ。チョド物をタツねますか、アナダ、トッコンションメンするテすか」と入ってくる。朝鮮語を第一言語とする話者の語り口を模しているの、無声音と有声音が変則的である。例えば「あなた」を「アナダ」と表記している。「トッコンションメン」とは渡航証明で、当時は朝鮮半島から日本に渡航するには下付願いを出す必要があったのである。その依頼に代書屋に來た場面である。しかし日本語を第一言語とする話者であれば、代書屋に入って開口一番に「あなた、渡航証明しますか」というような尋ね方はしないであろう。いかにも日本語を第二言語として学習・習得した話者の言葉遣いであるように描かれている。この辺りが、話し手との社会的関係などを深く考慮に入れずに取り敢えず聞き手を「あなた」と称する例の先駆けと言えそうである。

妻から夫への呼びかけは「あんた」が無標であろう。「あなた」の実例としては、二代目の故・枝雀師が演じた噺『延陽伯』で長屋暮らしの男に嫁いできた延陽伯に、男が「アナアタ、コトオバア、ワタアシ、難シクテワカリイニクイイ」と外国人に話すような妙な訛りで語りかけている(『枝雀全集』第四卷)²⁾。夫が妻に呼びかけるという点において、男女が逆転している。

⑥「あんた」

妻から夫に「あんた」と呼びかけるのは、長屋住まいの夫婦であればこれが最も普通であろう。しかし逆に、夫から妻への呼称としては少ないように思われる。先代米團治師の筆になる噺『弱法師』台本には、店の店主が妻女に「すると何かい^{あんた}貴女はどうしても庖丁屋の聴き損ないじゃ、この俊三が注文をした口上に間違いはなかったと言い張るのやな」と談判している(『寄席随筆』)。俊三は出奔したまま行方知れずとなり、一年後には法要を営む。その席で妻女は手っ伝いの熊五郎に「ほんにあの時にはあんたに甚いお世話になりましたなァ」と述懐する。その後、妻女から当主に「いえ、それはなァ。貴方^{あんた}かて吾が子が可愛いと思もやこそ言うて遣っとくなはったんだすわなァ」と逆向きながらあんた呼ばわりである。夫婦が互いに相手を「あんた」と呼んでいる例は珍しい。夫は妻をお前呼ばわりすることが多いからである。

筑摩文庫版の『米朝全集』第一卷『正月丁稚』において、サゲ近くで番頭が旦那に向かい「へえへえ、昔からあんた、降る(鶴)は千年といいまっしゃろがな」とあんた呼ばわりをしている。しかし創元社版の全集では、このあんた呼ばわりはない。本来ならば「あなた」は対等あるいは自分

より目下の者に対して用うべきであろう。ここでのあんた呼ばわりは、口を滑らせたと見るべきかも知れない。卑尊度で測るとすれば、中立より少し卑に触れているが、親しみや愛情が籠もっている。

⑦「そち」

当主が丁稚に呼びかけるのに、最も丁寧に聞こえるのが「そち」という言い方であろう。これは分類上、尊大語と言える。噺『正月丁稚』で、次のような会話を交わしている（『米朝全集』第四巻）。

(2) 定「ああ、旦那さん、もう遊びに行けまんのやなあ」

旦那「これこれ、そちにはまだ用事がある」

定「なんでわたいに用事がおまんねん」

旦那「これから年始回りに行く。そのお供について」

定「うーん、そんなやつたら、亀吉とんかて、友吉とんかて、いてまっしゃないか」

旦那「いやいや、亀吉や友吉ではいかんねん。年始のお供にはそちはまことによう似合うねん」

この会話には人称代名詞や、人名に付ける敬称の実例が多様に展開されており、興味が尽きない。まずは上述の「そち」、対して定吉は自称を「わたい」としている。朋輩の丁稚である亀吉や友吉に敬称「どん」を付けているが、同化によって無声化し、促音も挿入されて「亀吉とんや友吉とん」となる。当主は丁稚の名前は呼び捨てにする。「そち」は尊大語として形式張った響きがあるが、「そちはまことによう似合うねん」の終助詞「ねん」が庶民的で「そち」とそぐわないという印象を受ける。「そちはまことによう似合う」とすれば、齟齬はなくなる。次も当主が丁稚に対して用事を言いつける場面である（『米朝全集』第五巻）。噺『次の御用日』で、嬢^{とう}やんのお稽古事にお供に付いて行くように常吉が命ぜられる。自分でなくとも、亀吉や定吉のお供でも良いのではないかという常吉の申し立てに、当主は「亀や定ではいかん。どういふものか、常吉やないといかんちゅうて、あの子はそちが虫が好くねん」と言い含める。ここでも「好くねん」という文末である。

もう一例の「そち」は、お寺の和尚が小坊主（実は実子）に対して呼びかけている。噺『ぬの字鼠』で、和尚が「どうしてそちは、そう、どもならんのじゃ」と小言を言う（『米朝全集』第六巻）。ここは長々とした小言で、途中で「お前もそのままにしとけばええのに、うろたえくさって、馬鹿が……」と叱りつける。実子であるだけに、感情が生で表出するのであろう。

「⑧そなた、⑨こなた、⑩こんた、⑪おまはん」

二人称代名詞で「そなた」と「こなた」を比較してみる。『宿屋仇』で、源兵衛が回顧談として小間物の行商で高槻藩の重役である小柳彦九郎宅に出向いたところ、奥方が一人で留守番、「これはこれは小間物屋、今日は旦那殿は留守なり、女中どもは皆宿下がり、わらわ一人で徒然の折、ちとそなたに誂えのしたいものがある。どうぞこちらへ上がったも」と請じ入れられる。武家の奥方が登場する場面というのは、この噺以外にないので貴重である。女性としての自称が「わらわ」、町人である源兵衛には「そなた」と丁寧な代名詞で呼びかけている。「たも」という命令形も丁寧

である。次の例は、噺『テレスコ』で、長崎の大浦で仁助と名乗る漁師がサゲ前で妻に向かって「そなたがそんな……火物断ちまでしてくれた甲斐ものうて、わしは死罪を申し渡された」（『米朝全集』第五巻）。随分と丁寧な言葉遣いである。

旅噺『煮売り屋』は、東の旅はお伊勢さん詣り『伊勢参宮神之賑』で『七度狐』と続けて口演されることが多い（筑摩書房版米朝全集）。煮売り屋の屋号は「柳屋」であるが、その看板に「一せんめし 酒肴いろ／＼あり やなきや」と書いてある。往時の仮名遣いで、濁点はない。縦書きでは、「／＼」は「く」の字を長く引き延ばしたようにも見える。それを喜六が「ひとつせんめし 酒肴いろおくうくう ありや、なきや」と読んで、清六に「一膳飯、酒肴いろいろあり、柳屋やがな」と窘められる。二人が泥鰌汁を注文したところ、当主は「これこれ婆どんや、客人泥鰌汁がええっちなさるでな、ちょっとこなた町まで味噌買いに行てきとおくれ。わしゃこれから笊持って裏に泥鰌すくいに行てくるさかい」とのんびりしたものである。ここでは「婆どん」という呼びかけと「こなた」という人称代名詞が併用されている。『煮売り屋』の場面は奈良から南下して桜井に向かう道中が想定されている（桂文我師『伊勢参宮神賑』による）が、そのような鄙の土地でも連れ合いを「こなた」と呼ぶ気遣いが見られるのである。「こなた」は身内であり、「そなた」は身内でない者に対しての人称代名詞である。

珍しい例で、猿回しの猿に「こなた」と呼びかける場面がある（林家染丸師の口演筆記を、上方落語メモというページで参照した。<http://kamigata.fan.coocan.jp>）。噺『堀川』は芝居『近頃河原達引』猿回しの段から名前を取ったのであるが、喧嘩極道の息子を起こすのに、猿回しの与次兵衛さんが「おい太夫、ええかな、これからな、こなたと父^{とと}とでな、ここのオッチャン起こすねや。名代の腕力や、もし父に無茶なことしてきたら、バリバリッ^とと顔かきむしって血だらけにしてやれ」と言い含める。頭の良い猿のこと、飼主の言い分はこれぐらいは理解したであろう。猿に「太夫」と呼びかけているのも面白い。

代名詞「こなた」が簡略化された形に「こんた」がある。二拍目が撥音化することによって、「こなた」の三音節が「こんた」では二音節三拍になる。考えてみると、「あなた」が「あんた」と音声・音韻変化するのと全く同様の過程を経ているのである。しかし「あんた」に比べると「こんた」の出現頻度は何百分の一かという程少ない。『百年目』で、当主が赤梅檀と難莚草の喩え話で番頭を諭す場面がある（『米朝全集』第六巻）。「こんたの骨折りで毎年大福帳が一冊ずつ汚れていく、ありがたいこっちゃと思てる」「こんたという難莚草に枯れられたら、この赤梅檀、ひとたりもないでな」という具合である。ところが、同じ場面で「こなた」も併用されているのである。「こなた一家の主を旦那というのはどういうわけか知ってなはるか…」「まあ、ここのうちにたとえて言うたら、さしずめわしが赤梅檀、こなたが難莚草じゃ」。つまり、少なくともこの場面では「こなた」と「こんた」は同程度の卑尊度であると言える。但し、使用頻度は「こんた」がかなり少ない。『百年目』でも、「こんた」という呼びかけはこの場面以外に見られない。この場面では、当主は夜通しかけて帳面を調べ、番頭が店の金に手を着けていないことを確かめた上で「老婆心ながら、今後ともひとつ、よろしゅうお頼もうしますぞ」と番頭を許すのである。一家の当主とはいえ、実務は番頭に任しているという往時の船場商家がこうであった、という実情が克明である。「こなた、こんた」という言葉遣いに船場大家の当主という風格が滲み出るような演出である。

しかし、これだけではない。直後に「ここに孫の太鼓があるで、わし叩くさかい、おまはん踊っ

てみ」「しかし、昨日は相当うろたえてたとみえて、妙な挨拶をしたなあ、おまはん」というように「おまはん」呼ばわりもしている。もっと珍しいのは「しかしなあ次平衛どん、気イ悪してもろては困るが…」と番頭の名を呼んでいる点である。後にも先にも、当主が番頭を名前で呼ぶのはこれ以外に例がない。これはお茶屋遊びの折りに番頭が「つぎさん」と幫間や芸者連中から呼ばれていることと関連するかも知れない。遊びの席では本名そのままというのは具合が悪いが、全く無関係でも困る、という辺りで「次平衛」の「次」を訓読みして「つぎさん」と呼び習わしたものであろう。

⑫「そこもと」

噺『ふたなり』で代官所の役人二人が検死をするのに「ご同役、ご披見を」「いや、まず、そこもとから」という会話を交わしている（『米朝全集』第七巻）。『日本国語大辞典』には「対称。多くは、武士がやや目上と思われる相手、同輩、もしくはそれ以下のものに対して用いた。まれに町人の使用例も見受けられるが、格式張った言い方で、老人、家主などが用いた。時代が下ると待遇度も落ちた」という説明がある。ここでは同輩間の会話である。漢字では其処許などの標記である。「其処許」と「某」で対になる。

⑬「貴殿」

現代においても使用することがある「貴殿」という尊称は、噺では少なかった。『関津富』という珍しい噺で主人公が、その名も「奥州二本松の住人、黒雲雷之助夏鳴入道雷吞」と名乗って道場に乗り込む場面がある（桂文我師『続 復活珍品上方落語選集』）。無論、偽名である。道場で門人が「貴殿のお名前は、何と仰るので」と尋ねたからである。道場主の長沼四郎左衛門と手合わせになった段では、道場主は更に丁寧に「ご貴殿」と接頭辞付きの呼びかけをした。

これら人称代名詞については、最終節で纏めて分析する。

第三節 尊敬語の名詞

ここで採り上げるのは事物の名称など一般の名詞であるが、性質上、聞き手に対する敬意表明ではなく丁寧語という位置付けをする。また、「酒」を「ささ」と言うなど、言い換え表現を扱う。「お、ご」などの接頭辞付加による丁寧語あるいは美化語は一般的で数も多いので、接辞の項で論じる。登場人物は武家の奥方や公家に奉公していた女性などが中心である。会話が多い落語の特性として、人称代名詞は上述のように多様であった。その人称代名詞に比べても、尊敬語あるいは丁寧語としての名詞は限定される。

「お家」

元来は「家」という普通名詞に接頭辞「お」が付加されたものであるが、家の中に住む主婦を指すようになった（『大阪ことば事典』97頁）。噺『質屋蔵』で、担ぎの呉服屋が長屋を毎日行商して歩く様子が質屋当主によって語られる（『米朝全集』第六巻）。呉服屋は昼時に訪問した家で「お家、ちょっとここでお弁をつかわしとおくはなれ」と断る。現代の標準的な日本語であれば、「奥さん」というような呼びかけであろう。人称代名詞的な側面もある呼びかけであるが、「お家」は名詞に分類しておく。「弁当」という漢語を「お弁」というように省略かつ接頭辞付加した例につ

いては、別項で論じる。ここでは目の前に居る相手に対して「お家」と呼びかける用法である。往時は、隠居した当主の配偶者を「お家はん」と称した。「お家」というのは対象範囲が広いが、「お家はん」となると限定された人間関係の中でしか通用しないという、語用論的側面に注意が必要である。

「しらげ、よね、一文字草」

京の公家に長年奉公していたために言葉が難しいというのを承知で長屋の男に嫁いできた延陽伯の名前から取った同名の噺である（『枝雀全集』第四巻）。この噺は、延陽伯の言葉遣いが日常語とかけ離れている所から笑いを起こすようになっている。それが過剰になると、実際とは異なる言葉遣いになることもある。以下に指摘する「白根草」が一例である。まずは祝言が済んだ夜の夜中にむくむくっと起き上がり、枕元に両手をついて「ああら我が君、一端偕老同穴の契りを結びしうえからは、千代八千代に変わらせ給うことなかれ」と宣した。夫を「我が君」、末永くという意を「千代八千代」という難しい言い様にしている点が滑稽である。翌朝、ご飯を炊こうとして米の在処を尋ねる。最初は女房詞で「しらげ」、次に「よね」と言い換えるが、いずれも誤解を招く。三度目に「こめ」と言い直して、やっと意が通じた。次に味噌汁の具をどうするか案じていたところに、振り売りの八百屋が通りかかる。延陽伯は「そもじの携える白根草、一束の値、幾何なりや」と尋ねている³⁾。「そもじ」は女房詞で「そなた」の「そ」に「もじ」を添えたのが語源である。「白根草」は『日本国語大辞典』では芋幹いもがらの女房詞、芹の異名という説明である。江戸ネタでは「垂乳根」と改題され、この場面は「そのほうが携えたる鮮荷のうち一文字草、値何銭文なりや」（麻生（1999:37）⁴⁾）となっている。一文字草はまさに葱を指す。

「ささ」

武家の奥方が登場する噺というのも珍しいが、『宿屋仇』で高槻藩の重役小柳彦九郎宅での様子が語られている（『米朝全集』第七巻）。後に白状することになるが、源兵衛は三十石舟で小耳に挟んだ事件を我が事のように語ったのである。実体験のように語った場面では奥方に座敷に通され、「そなた、ささは食べぬかえ」と尋ねられる。「ささ」は酒の意である。「食べぬかえ」の終助詞にも着目したい。疑問を表す終助詞「かえ」で、常体でありながら女性特有の柔らかさが出ている。これが「食べぬか」という言い方であれば、紋切り型で詰問のような些か強い調子に感じられる。

「御衣」

宮中での言葉遣いを一例挙げる。噺『はてなの茶碗』で、茶道具屋の金兵衛さんが関白鷹司公に持ち込んだ清水焼の茶碗が御所中の大評判となり、遂に時の帝までが「朕もその茶碗が見たい」とご所望となる（古今亭志ん生師による口演）。茶金さんは精進潔斎して茶碗を持参したが、どんな方の前へ出ても同じ事、水を入れた茶碗からぼたりぼたり、..、「御衣の裾を濡らしました。『日本国語大辞典』によると「おん」は接頭辞で、「着る人を敬って、その衣服をいう語。お召し物」という説明と、「みぞ、ぎょい、おんころも、おおんぞ」という言い方が並んでいる。「おんぞ」は御所言葉と分類できるであろう。

「お饅、お弁、お座布」

ここまでは女性の登場人物による丁寧語もしくは美化語と称しても良い部類の名詞であったが、男性でも同様の例が見られる。またここで扱うのは、漢語由来の名詞を略して一音節化し、なおかつ語接頭辞「お」を接辞するという共通点がある。

『饅頭こわい』において、佐藤光太郎なる人物が饅頭のことを「お饅」と称して一悶着が持ち上がる（『米朝全集』第七巻）。この人物、サゲ近くになって友達連中が「この一件が新聞に出たら、. . .」と評定するうちに名前が明らかになるが、光つつあんこと佐藤光太郎氏はおそらく、「何が怖いか」と尋ねられて「お饅頭」と答えるのではそのものずばりであるから、遠回しに「お饅」という言い方にしたのであろう。案の定、集まっていた若い衆からは「お饅……お饅というたら、大阪でお饅ちゅうたら、饅頭のこってっせ。食べる饅頭、お菓子の。あれが怖いのん、ええ」という反応が返ってくる。これ以降は「お饅」という呼び方はなくなり、「饅頭」一辺倒である。意図的に接頭辞「お」を付けたものであろうが、「まん」だけでは意味が通らない。「お饅」は船場言葉らしい上品な響きである。

「お弁」は、噺『質屋蔵』で、担ぎの呉服屋が長屋を毎日行商して歩く様子が質屋当主によって語られる場面である（『米朝全集』第六巻）。呉服屋は昼時に訪問した家で「お家、ちょっとここでお弁をつかわしとおくなはれ」と頼む。「弁当」という漢語を「お弁」というように省略かつ接頭辞付加した言い方である。

この流れで、「座布団」も漢語系と扱う。「座布団」の前半を取ってきて「お」を付け、「お座布」というのが噺『不動坊』に見られる（『米朝全集』第七巻）。独り者の利吉に、家主が講釈師不動坊火焰先生の未亡人となったお滝さんの縁談を持ってきた。急に態度を変えた利吉、「まあ、ちょっとお座布当てとおくれやす、お座布当てとおくれやす」と愛想をする。また噺『はてなの茶碗』で、茶金さんが近くを通りかかった油屋を請じ入れて、「まあまあ、お座布^{ざぶ}団を持ってきたはれ」と座布団を持ってこさせる（同第六巻）。

ここで挙げた三語の原形「饅頭、弁当、座布団」は、漢字で表記することによっても漢語系であると考えられる。ところが、接頭辞は「御」ではなく「お」が当てられて「お饅頭、お弁当、お座布団」となる。更にそれが短略化されて「お饅、お弁、お座布」となるところが共通している。

「おぶ、ぶぶ」

もう一つ、丁寧語として名詞言い換えの例を挙げる。京阪方言ではお茶のことを「ぶぶ」と言う。お茶漬は「ぶぶ漬け」になる。『大阪ことば事典』には、「オブ」という見出しで、「茶のことをブブといい、それにさらにオを付けたもの。オブウともいう」（音高を示す傍点は省略した）という説明があり、次には「オブヅケ」（ブブ漬）という見出し語が見られる。「ぶぶ」は「ぶ」とまで約めることは不可能であるが、接頭辞「お」の付加によって「おぶ」となる。噺『不動坊』で、家主が持ってきた縁談を店子の利吉が喜び、家主の帰り際に「えらい、ぶぶもあげまへんと……去んでからゆっくりおあがり」と見送る（『米朝全集』第七巻）。『向う付け』という噺で、葬礼の帳場を任された無筆の二人が参列者の帳面付けに難儀する場面がある（同書）。お互いに相手に帳面付けを頼もうと考えて、「ぶぶが入りました。まあお茶をひとつ」と腹の探り合いになる場面である。また『軒茶屋』という噺で、お茶屋の姐貴が客のターさんに「まあ、おぶをどうぞ」と

勧める（同第一巻）。

「おみや」

和語の「みやげ」に接頭辞の「お」を加え、元の「みやげ」三音節目を略して「おみや」という語形になる。噺『卯の日詣り』は住吉さんにご参詣となるが、「住吉踊り、お買いやーす、おみや お買いやす」と売り声に呼ばわっている（『米朝全集』第一巻）。

「おいど」

身体の部位を指す名詞で、丁寧語の部類が見られるのは珍しい。身体の各部位を指す名詞は卑罵語の類で多様に見られるが、丁寧語あるいは美化語と考えられるのは尻の意で「おいど」だけではないかと思われる。「おいど」という響きは、丁寧語・美化語ではあるが、部位が部位であるだけにどこか滑稽味を有する。『あん七』という噺で無筆の七兵衛が火鉢で灰の上に字の書き方を教わる（『米朝全集』第一巻）。「七」字の書き方として、「十」字の二画目で尻を曲げたら「七」になるというので、「ちょっとやっでご覧あそばせ」と田中氏の妻女が促す。二画目を曲げる段で「火箸のお尻をちょいと曲げて」と言うや否や、七兵衛は本物の火箸を曲げてしまう。ここでは人体の尻ではなく、「七」字の二画目を曲げることを火箸の尻を曲げる、というように誤解したのである。

「御難」

漢語系の「難」に漢語接頭辞として「御」が接辞した「御難」というのは、興行界で旅巡業に出たものの、不入りで身動きが取れなくなったという状況を言う業界用語である。噺『不動坊』で、講釈師の不動坊火焰先生、山陽路に巡業に出たものの御難続き、流行病で客死するという結末に到る（『米朝全集』第七巻）。これを「行く先行く先が不入り続きで、御難に遭うて、広島^{いど}の宿屋で身動きが取れんようになった」とある。噺『べかこ』も、噺家の泥丹坊堅丸師が肥前の武雄で御難に遭遇して、大黒屋市兵衛という宿屋で世話になっているという設定である（同書）。

「仁、御仁」

漢語のような字面で「仁」と書いて「じん」と読む。音読みになってはいるが、先の「御難」にしても和製漢語であろう。噺『近江八景』で、易者が客から「そうかて、こないだお彼岸に天王寺さん通ったら、あんた、今日は師匠の十三回忌言うてたがな」と指摘されて、「それはわしではない。別の仁じゃ」と答える（『米朝全集』第二巻）。この易者は、本題に入って友達を連れて来ていた客に「こちらの仁も見めるのか」と尋ねる。別の噺『墓の油』においても、墓の油売りが客を指して「はい、ああ、そちらの御仁」と応対している（同書）。また珍しい噺で、『関津富』に俳人が諸国行脚の武者修行と偽って道場主の長沼四郎左衛門と手合わせをする場面がある（桂文我師『続復活珍品上方落語選集』）。その場面^で道場主は「しかしながら、もしこの御仁が、剣の道を知らずして、ここに木剣を持っておるのなら、それこそ身共が、この御仁を殺しかねん」とは、心中で考えているのである。それにしても「御仁、身共」とは丁寧な言葉遣いであるが、「御仁」は相手のことを敬う尊敬語と言える。

「御意」

噺『立ち切れ線香』の速記で、曾呂利新左衛門師の速記を基にして先代米團治師が落語研究家である渡辺均氏に当てた手紙の中に見られる。書簡は七十年ほど前に書かれたのであるが、速記はそれより十年ほど前のものであり、言葉遣いは古風である。百日の蔵住まいが満期^{あがり}になったのかと尋ねる若旦那に、番頭は「御意でございます」と答える。時代がかった、古風な返答である。

「ご如才」

『大阪ことば事典』には「如在無い」という表記で、「ぬかりない。ぬけめない。如在はゾンザイ〔存在〕と等しくありのままということで、ていねいにせぬ義である。如才は当て字」とある。『日本国語大辞典』では「如在無・如才無」という表記で、「人や物事に対して手拔かりがない。手落ちがない。なおざりにしない。気がきく」という説明になっている。現代では、「如才がない」というように定型句化しているものと考えられる。噺『百年目』では、隠れ遊びをしていたつものの番頭が花見の場で当主と鉢合わせする場面がある（『米朝全集』第六卷）。その場で当主は、周囲の取り巻き連に「ああ、みなさん方、これはな、うちの大事の番頭さんじゃで、怪我ささんように遊ばしてやっとおくなされや。ご如才もあろまいが、日が暮れはちょっと小早う帰してやっとおくれやす」と頼む。「改めて御願いをするまでもない、抜かりはなかるうが」という気持ちが感じ取られる。

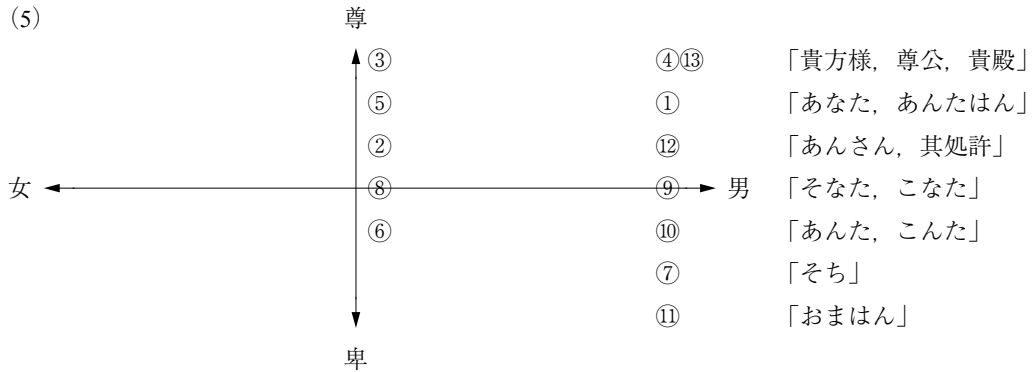
「究竟」

噺『べかこ』から、漢語系の「究竟」という語を採り上げる（『米朝全集』第七卷）。泥丹坊堅丸という奇妙な名前の噺家が、西国に巡業に出て御難に遭う。御難というのは、巡業が不入りで難儀することをいう。肥前の武雄で大黒屋市兵衛という宿で世話になっていたところ、お城の菅沼軍十郎という侍がお姫様が気病いで、何か気晴らしになるような催しはないかとお尋ねになった。そこで堅丸さんのことを聞き及んで「それは究竟じゃ」。大黒屋が周旋をして、なかなか評判が良いということを聞いて、また「おお、それは究竟じゃ」。究竟とは『日本国語大辞典』によると都合の良いこと、お誂え向きの意であるという。現代の日本語においては究竟という語は廃用に近いと思われるが、場面によっては必要な語彙となることもあるようである。小咄『試し斬り』でも、侍言葉として例が見られる（『米朝全集』第五卷）。侍が新たに買い求めた刀、演題にあるように試し斬りをする機会を探っていた。日本橋の袂で「野伏せりの類い、これ究竟の試しものと心得て、すつと刀を抜き放ちましてな」と、随分と身勝手な理屈である⁵⁾。状況としては、「これ幸い」と自分に都合良く物事を運ぶというような前提で成り立っていると言える。

「ご尊顔、恐悦」

噺『本能寺』で、武智光秀（史実の明智光秀）が主君である小田春永（織田信長）へ対面の挨拶として「我が君様の、いつに変わらぬご尊顔を拝し、光秀、恐悦に存じます」と述べる（『米朝全集』第七卷）。「ご尊顔、恐悦」というのは臣下として主君に最大限の尊敬度をもって挨拶しているのである。『日本国語大辞典』では、「尊顔」に「貴人の尊い顔。また、他人を敬って、その顔かたちをいう語」、「恐悦」に「目上の人に関したことやその好意などを、たいそう喜ばしく思うさ

(5)



ここでは、卑尊度という尺度は他人行儀の度合いと解する方が妥当かも知れない。つまりこの図で下に行くほど親密度が高いという意味合いであって、相手を卑しめ貶めるというような意図は稀薄である。そのような部類は卑罵語の部類として扱う。またここでの分析は話し手の性別のみを考慮したので、誰に向かって呼びかけているかは区別していない。登場人物は男が圧倒的に多いので、必然的に発話数も多くなる。登場人物が男ばかりで女性は居ない、という断は多数あるが、逆に女性ばかりで男が出てこないという断は、短い小咄を除けばないと断言することができる。尊敬度の低い部類「おまはん、そち」は男からの呼びかけである。尊敬度の高い部類が「貴方様、尊公」で、前者は男女双方の発話例が見られる。「尊公」は男性が男性に対して用いるという説明があったように、語彙的に特殊である。ここでは、全般的に女性が用いる二人称代名詞は丁寧に傾くという傾向を見て取ることができる。縦方向、つまり卑尊度に関しては、もっと多くの例を集めて分析すれば、多段階の卑尊度を設定できる可能性も指摘しておく。

このように、二人称代名詞だけ検証しても非常に多様であり、「誰が誰に対して、どのような状況でものを言うか」によって微妙な区別配慮をせねばならない。更に『百年目』におけるように、同じ場面でも「こなた、こんた、おまはん」と使い分けをしている場合がある。このような多様性は船場の大店を舞台とする古典落語に特有であり、分析の素材に事欠かないと言える。

注

- 1) 単に「旦那さん」ではなく、「村上の」と実名を出しているのは珍しい。これは後にミナミの幫間繁八が座敷に勝手に上がり込む場面で、人物の特定が必要になるからという伏線を張っているのである。
- 2) これも一種の役割語と言えるであろう。例に採った言い方は、「あなたの言葉は私にとって難しくて分かりにくい」というように補うことが出来る。金水氏（2014：23）で指摘されているように、格助詞が脱落しているのである。加えて、音調を辿々しくすれば外国人が話す、あるいは外国人に向かって話すような調子になる。
- 3) 本文で指摘したように、「白根草」は葱とは別物である。
- 4) 同書では、新妻が初めて長屋を訪れた挨拶として「せんにくせんだんにあつてこれを学ばざれば金たらんと欲す」と文字化している。「せんにく、せんだん」が意味不明である。この挨拶は、参照すべき文献が少ないことも難点である。
- 5) 人道的見地からは、自分が試し斬りにするのに無辜の人を切り捨てるというような行為は許されるものではない。小咄のサゲは、刀の切れ味が鈍いので斬り付けられた方は「どいつやい、毎晩毎晩どつきに来るのは」と命に別状がないことになっている。しかしながら、この人命軽視という心根は説明が付かないであろう。

参考文献

- 浅田秀子（2001）『敬語で解く日本の平等・不平等』東京：講談社。
- 井上史雄（編，2017）『敬語は変わる 大規模調査からわかる百年の動き』東京：大修館。
- 井上史雄・遣水兼貴（2017）『『敬語の指針』に見る現代敬語の性格変化』井上（2017）所収。
- 桂枝雀（1995, 1996）『桂枝雀爆笑コレクション』全五巻，東京：筑摩書房。
- 桂文我（2002）『続 復活珍品上方落語選集』大阪：燃焼社。
- 桂文我（2014）『伊勢参宮神賑』東京：青蛙房。
- 桂米朝（2002, 2003）『上方落語 桂米朝コレクション』全八集。東京：筑摩書房。
- 桂米朝（2013, 2014）『米朝落語全集』全八巻，増補改訂版。大阪：創元社。
- 桂米朝（2007，編）『四世桂米團治寄席隨筆』東京：岩波書店。
- 角岡賢一（2017 a）「上方落語に見られる軽蔑語の実例」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第 26 巻。pp.95-114。
- 角岡賢一（2017 b）「上方落語に残るお茶屋文化」『京都産業学研究』第十五号。pp.125-142。
- 角岡賢一（2019）「日本語尊大表現の語用論的分析」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第 28 巻。pp.3-22。
- 角岡賢一（2020）「待遇表現としての尊大語と卑罵語」米倉，他（編）所収。
- 菊地康人（1997）『敬語』東京：講談社。
- 旭堂南陵（2011）『続々・明治期大阪の演芸速記本基礎研究』大阪：たる出版。
- 金木敏（2014）『コレモ日本語アルカ』東京：岩波書店。
- 真田信治（監修，2018）『関西弁事典』東京：ひつじ書房。
- 釈徹宗（2010）『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
- 釈徹宗（2017）『落語に花咲く仏教』東京：朝日新聞出版。
- 関山和夫（1990）『安楽庵策伝和尚の生涯』京都：法蔵館。
- 関山和夫（2001）『庶民芸能と仏教』東京：大蔵出版。
- 高島幸次（2018）『上方落語史観』大阪：一四〇 B。
- 橘ノ圓都（2004）『鬼門風呂，高尾，浄瑠璃息子』東京：ビクター伝統文化振興財団。
- 東大落語会（編，1994）『増補 落語事典』改訂版。東京：青蛙房。
- 竹田晃子（2017）「卑罵語と敬語の発達」井上（2017）所収。
- 前川佳子（2016）『船場大阪を語りつく』大阪：和泉書院。
- 前田勇（1966）『上方落語の歴史』改訂増補版。大阪：杉本書店。
- 牧村史陽（1984）『大阪ことば事典』東京：講談社。
- 山口登（2000）「選択体系機能理論の構図」小泉保（編）『言語研究における機能主義』所収，東京：くろしお出版。
- 米倉よう子，山本修，浅井良策（編，2020）『ことばから心へ 認知の深淵』東京：開拓社。